

別山加宝虚空蔵信仰論序説（Ⅰ）

吉 田 幸 平 中部女子短期大学

THE HAKUSAN MOUNTAIN WORSHIP. AN INTRODUCTION OF THE BUDDHIST SAINT FAITH KOKUZO AT THE MT. BESSAN IN THE CENTER OF HONSHU ISLAND IN JAPAN

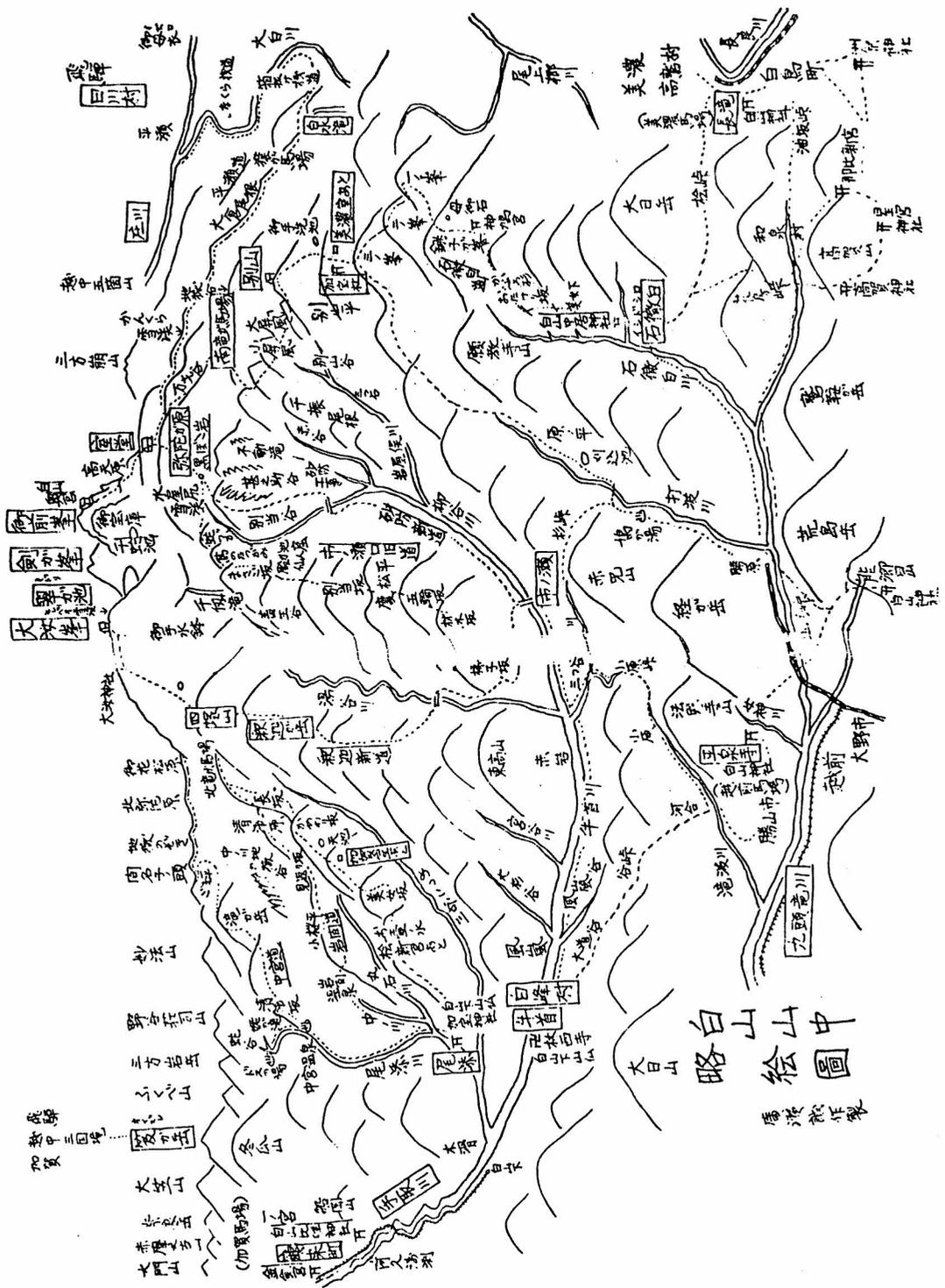
Kohei YOSHIDA *Chubu Women's Junior College*

I. 岐阜県史の高賀山信仰

岐阜県史22巻中、中世通史編において、『高賀山信仰』と称する独立信仰篇を200頁に亘って論述した。それは白山修験道と関係のない独立した高賀山（1,224m）信仰であり、高賀山麓にある高賀権現六社（郡上郡那比新宮神社・本宮神社・美並村粥川星宮神社・武儀郡洞戸高賀神社・美濃市滝神社・金峰神社）のもつ本地仏虚空蔵菩薩信仰が中心であり、別山が本地仏聖観音であるから、白山信仰へは、直接関係がなく、異質の虚空蔵信仰がこの高賀権現を中心として展開したと規定したのである。

即ち、この虚空蔵菩薩信仰の発祥は、天暦年間（947～956）に「瓢ヶ嶽に悪魔住み、村里郷党に障害を成す」と那比新宮縁起は書き始めて、「其形牛に似て、啼声亦牛の如し、形を見るもの魂を消し、声を聞くもの胸を焦す。藤原高光公勅命を奉じて、濃北郡上郡大谷村（現美並村粥川）に発向し給う。或時悪鬼が形相たけ一丈あまりの夜叉の如く、角は炎、眼は車輪の如く雲間に霹（へきれき）す。時に高光公諸神諸神に祈誓をかけ難なく退治し、帝都に帰らせ給ふ。其の後彼の悪鬼が亡魂此嶺に留まりて、ややもすれば近郷大紅連（ぐれん）をなし、夏の日霜を降らせ、秋の日五穀を枯らし様々の障りを為す。庶民重ねて奏聞し奉りければ、高光公再び御下向まします。時に庶民歓喜をなし、早天雨に逢ひ幼児の母を慕ふが如し。高光公深山幽谷を狩り給ふと雖も、変化のもの故其形慥かに見分け難し。然るに高光公幼少より虚空蔵菩薩を信仰し給ふ。此度別して御祈念浅からず。心に虚空蔵大菩薩を念じ給へば辱なくも彼尊は、さても凄まじき御形相にて高光公に告げ給はく、是より南の岳に登りて待つべし、との給ひ消すが如くに隠れ給ふ。高光公南の岳に登り待ち給ふに、虚空より一丈余りの大鳥雷光の如くひらめき渡り高光公目がけて舞ひ降る。高光公蕪矢（かぶらや）を以て射落し給へば、大鳥は上へ下へと荒狂ふ。それ討留めよと又雁股（かりまた）にて首掻き切り御剣を以てづたづたに切り離し、両度の死骸を一つにして亡魂失せよと焼き払ひ給ふ」云々とある。

虚空蔵菩薩の功護により退魔を成就させた高光は、勅命により国家鎮護の霊地として前記の六社を建立したという。この高光伝説の立証史料は、近世までに幾度か書き改められた三つの縁起本があるが確証がない。星宮神社には天暦7年（953）の大般若経の断簡一卷が重要文化財としてあり、その奥書には「願主錦村主実貫」とあるが来歴は不詳である。高賀神社の別当寺であった蓮華蓬寺には、天治元年（1124）の11面観音があり、銘文のなかに、「僧良朝山氏、高橋清（嘉）家女（阿氏）□□」、語清元 額田



中山略圖

馬渡 繪作

氏、高橋安行藤原(氏)僧(縁)□□尼妙□、高橋安(朝)□尼妙□、僧(顯)□□家女高□□、重□原氏額田氏□□¹⁾とあり、語は語部で美濃に「語部」が多かったことが知られるし、額田氏については、「倭名類聚抄」によると美濃国池田郡6郷の一つに額田郷があるが、近江国坂田郡であるともいわれる他全く明らかにされていない。

また、『高賀山信仰美術』の条では、「高賀山信仰は村上天皇時代にはじまると伝えられているが、その来歴についての確実な文献資料はない」云々とし、遺品について、高賀権現諸社には、那比の新宮神社には金銅虚空蔵菩薩のほか鎌倉時代から室町時代にかけての虚空蔵菩薩懸仏151面（全248面、重要文化財）がある。

星宮神社や高賀神社にも、鎌倉末期の木彫虚空蔵菩薩や、多くの虚空蔵菩薩の懸仏もあって、高賀山信仰の主体が虚空蔵信仰であるとし、鎌倉時代後期に虚空蔵菩薩信仰が導入され高賀権現の主流となっていくことから、「高賀山修験道」の確立を見るのであるとしている。以上のように高賀山信仰を規定してきているが不詳の部分が多く、また土地の古老に聞いても、そのような高賀山信仰という言葉聞いたことがないといい、もともと白山神社といており、如何なる郷土史料を翻しても、この詞は見出せないのである。

なお、白山信仰の美術の条には、「白山山岳信仰の歴史を辿ることは文献がないために困難なことである」とし、白山山岳信仰については全然記載されていない。

高賀山については、「白山信仰にみるように、人々の生活から遠く離れ、火を噴く恐い山としてでなく、むしろ人々の生活を守る神として、いつも彼等の生活圏にして、山の幸を司る山の神であったものといえる」云々として（通史編中世678頁）、民俗学的に見た山の神としているが、元來山の神とは仏教が大嫌いであり、この高賀山麓は虚空蔵菩薩や白山信仰の本地仏の11面観音や阿弥陀如来等真言、天台の極めて旺んな所であったのである。

注 1) 文中（ ）内は日本彫刻史基礎資料集成による。

II. 美濃馬場の禪定道と石徹白御師

白山禪定の美濃の馬場としての白山長滝寺は、別山の前進基地として、また美濃、飛驒の白山神社525社の中心地でもあった。長滝寺の盛時には6谷、6院、30余坊といわれたが、普通は、阿名院、経聞坊、蔵泉坊、宝幢坊、大日坊、竹林坊、持喜坊であった。禪定道は前谷から桧峠を越えて、石徹白中在所に出て、上在所白山中居神社から、剣石、銚子ヶ峰、一の峰、二の峰、三の峰を経て別山に至り、それから、尾根づたいに御舎利山・油坂を通り、南龍ヶ馬場に出て室堂平から御前峰に詣でるわけである。即ち美濃馬場の禪定道は白山の南側の登拝路であったわけである。

加賀馬場・越前馬場・美濃馬場の三馬場の禪定道はもともと別々の独立発達したもので、互に独立性を持とうとしていた。その唯一の共通点は、いずれも越の大徳泰澄によって、開闢されたという伝承をもっており、加賀馬場だけは、異質の伝承（類聚国史第137巻畿外奉勅官社部に天智天皇6年に加賀国石川郡の白山神社に奉幣）がある。

『新選美濃志』には「長滝村は二日町の北にあり、郡上領127石7斗5升7合、阿名院長滝寺は天台宗、加賀白山社僧のうちと云、伽藍寺名多し、一切経あり、養老年泰澄法師加賀の白山北嶺にのぼり、神勅を蒙り、此地に白山権現を勧請して当寺を建立す。はじめ法相宗ありしが、天長5年（828）天台宗に改む。本尊大日如来の座像1丈2尺、左は釈迦、右は阿弥陀各9尺、四天王像ともに運慶の作。麓に大講堂あり。慶長元年建立の棟札に、肥前権守の宗里。飛驒権守藤原宗安とあり。当山6谷に6院ありて、神社仏閣30余宇、僧坊甚多く、天台の別院なり。養老6年天皇御惱、泰澄大師勅によ

り加持し奉り、御本復ありしかば、翌年白山3社の本地仏11面観音、聖観音、阿弥陀三尊等、帝自ら彫刻し給ひ、当山に納給へり、聖武天皇天平5年書写し給ひし紺紙金泥の観音経及び心経あり、又唐本の一切経、阿難筆貝多羅葉経1巻、其外宝剣類、仏舍利等数種の靈宝あり。今村内に存する社は、白山神社、祭神伊弉諾命、伊弉冊命、彦火々出命、及寺院は天台宗持善坊、大日坊、大本坊、蔵泉坊、経聞坊、宝幢坊、長滝寺、阿名院等なり。同境内より豆石と云うもの産出す』とある。

また『岐阜県神社要覧』には、「第44代元正天皇の御宇養老2年、越前の名僧泰澄長滝寺を開創し、白山権現並本地仏11面観音、阿弥陀の三尊を白木にて丈2尺7寸に彫刻し、従前彦火々出見尊の1社あり、此所に白山3社の神殿を建立し鎮安さる。当時白山中宮長滝寺と称号せり、美濃国神名帳内郡上郡小白山明神是なりと云。同7年白山3社本地仏11面観音、聖観音、阿弥陀の3尊を丈3尺彩色の像天皇万3札に刻し佐補大納言伴安麿を以て勅納し給ひ、爾来本地の2字を加へ、白山本地中宮長滝寺と称号す。

堀河天皇寛治8年(1095)社寺領として、飛州大野郡焼野荒野を下賜、後深草天皇建長7年社領として、飛州大野郡河上庄一円を下賜さる。(中略)』とあり、『美濃の長滝』には「天長5年(829)には法相宗の流儀を天台宗に改めているが、此の頃既に360坊の衆徒が常住しているこれらを地域によって、6谷6院に区画している。即ち、現在の高平の地に葦原谷開闢院があった。中部地方一帯の僧位出世を掌る様になったのも此の頃からである。御一条天皇の治安元年(1021)には天台別院の論旨を賜わり、莫大な神領を拝受して神威盛んなものがある。一方莊嚴講なるものがある。講中である衆徒は、先達としての資格を持ち、夏は白山へ登拝する集団の先頭に立って六根清浄をとまえ、冬は白山妙理大権現の御厨子を背負って全国に布教し、至るところに当神社の御分身を奉祀したのである。今日白山神社が全国で2,700社、岐阜県だけでも500社あるが、当神社が其の総社と仰がれるのはこの故である。こうして長滝は白山の表参道美濃馬場(白山登拝の拠点)として数百の坊中があり、常に数千の衆徒参拝人が全国から集散して一大文化の花を咲かせたのである」云々とあり。美濃馬場の繁栄が理解されるのである。

また石徹白の白山中居神社は、長滝寺と白山との中間にあって、泰澄創建といわれている。この村人は、白山へ登拝する人々の宿をし、また白山御師として、飛驒・美濃・尾張・三河・さらに遠江・駿河等東西の国々まで出かけ、守護符や白山の地図を配布したり、禅定者の案内をして生活してきた。

桜井正次檀那讓状には、

於三河 且方讓状

たきしり	あわふち	めう堂
たしろ	中かね	おうしろ
あめやま	かうへ	きわたし
是まんてう	たはらざき	作手11村
わつて	よか村	しまた
きはた	ぜんふ	すかぬま
こりやう	こた	おりたち
かさい嶋	たみね	なしの
ほと	おんはら	おしわ
ゆうしま	だんじ	たたもち
ふり	一しき	しほせ

中山	次やま	黒瀬
奈良瀬	ゑび田 <small>内かほれ うれかわい</small>	同 大かわい 田口
わい市	平山片	あはしろ
小林	たかれかわむき	なかし野
なかうし	大草	おうとうけ
なくら	大とうけ	ふせつ
ねはね	つき瀬	かわて

ふり草七郷7村共に、同信州之国者、ひろめ次第ニ渡事實正也

右譲渡候事實正也、但進退ならず候て、在所をこきやくなとせられ候ハ、さうりやうの方へうかゝい可被申候、我か覚悟として、たもんへうる事有間敷候、若たもんへうり候ハ、さうりやうかたへうり申様可有候、

仍定事如件
桜井平右衛門
正次（花押）

天正九年辛巳拾貳月吉日
平三をし

（御師）

とあり、また、経聞坊檀那連判（後欠）には、
檀那連判

白山本地長滝寺経聞坊檀那所、従往古到今相違無御座候、就夫如斯連判仕候而進候、

以上

正保二年丙戌八月日

遠州

一 松木嶋村	次 太 夫	㊦
一 三家村	庄屋 太郎右衛門	㊦
一 長嶋村	同 左 平 次	㊦
一 長嶋村	同 弥次兵衛	㊦
一 新堀村	宿 五郎右衛門	㊦
一 高園村	同 孫左衛門	（略押）
一 蔵中瀬村	庄屋 喜 平 次	㊦
一 富田村	同 佐 平 次	㊦
一 一色村	宿 大羽助右衛門	㊦
一 中之町一円	同 弥 兵 衛	㊦
一 池田庄	庄屋 善 右 衛 門	㊦
一 西田村	庄屋 糸 左 衛 門	㊦
一 高部之郷	庄屋 丸尾七郎左衛門	㊦
一 同郷	庄屋 平出与左衛門	㊦
一 赤尾村	庄屋 同はつた拾三郎	㊦
一 永神村	庄屋 八 兵 衛	㊦
一 袋引町	とい屋 西尾五郎左衛門	㊦

一 同町	同 田代八郎左衛門 ㊦
一 法丈村	庄屋 味岡仁左衛門 ㊦
一 下法丈村	庄屋 二郎八 ㊦
一 貫名村	同 六太夫 ㊦
一 下貫名村	同 平兵衛 (花押)
一 石野村	庄や 庄左衛門 ㊦
一 大池村	庄屋 市衛門尉 ㊦
一 同村	宿 市太夫 ㊦
一 飛鳥村	同 善兵衛 ㊦
一 下亦村	庄屋 六左衛門 ㊦
一 成滝村	庄屋 甚五郎 ㊦
一 新福寺村	宿 次郎右衛門 ㊦
一 池下村	庄屋 善衛門 ㊦
一 本所村	庄屋 九郎兵次 ㊦
一 原子村	宿 六郎左衛門 ㊦
一 小原子村	庄屋 清大夫 ㊦
一 きわり村	庄屋 干羽村左衛門四郎 ㊦
一 同村	宿 次郎兵衛 ㊦
一 西之谷村	庄屋 勘兵衛 ㊦
一 初馬ノ内下や村	同 勘右衛門 ㊦
一 初馬村	庄屋 四郎兵衛 (花押)
一 同村	同 吉兵衛 ㊦
一 西山村	同 次郎兵衛 ㊦
一 東山村	同 惣兵衛 ㊦
一 同しい橋村	同 彦左衛門 ㊦
一 奥野村	宿 長右衛門 ㊦
一 大向村	庄屋 七左衛門 ㊦
一 日坂町	平治屋 ㊦
一 海老名村	庄屋 佐兵衛 ㊦
一 影森村	同 太左衛門 ㊦
三州碧海郡	
一 今岡村	沢田猪兵衛 ㊦
一 東境村	庄屋 永田太郎左衛門
一 西境村	次左衛門
一 みよし村	三郎次 ㊦
同賀茂郡	
一 大平村	宿 弥右衛門 ㊦
一 荷懸村	庄屋 忠右衛門 ㊦
一 大洞村	庄屋 清右衛門 ㊦
一 手洗村	宿 彦作 ㊦

一 大坂村	久右衛門	㊦
一 鍛冶屋敷村	茂兵衛	㊦
一 とつのいり村	孫十郎	(花押)
一 水またき村	忠右衛門	(花押)
一 雑色村	久左衛門	(花押)
一 宮白村	与市郎	(花押)

稲葉貞通檀那安堵状

遠州の内所々其方檀那之覚

一とばの	一みなど
一福田	一がんしろ
一菊川	一かなや
一と志ろ	一よこ岡
一ゆ井	一大か
一いろ	一いくち
一おか田	己上

右今度、東覚坊より其方及申事、檀那13所の事如前々、其方へ宛行候上、末代不可有異儀候也

天正19

6月19日

(稲葉貞通)

(花押)

長滝寺

中坊

まいる

以上はその一例で、同坊支配の諸檀那の所在地は凡そ東海地方であったことがしられるが、その範囲は室町時代から桃山時代が主力であったのである。上記の外永享8年潤5月15日法印弘讚讓状、康正2年9月15日(1456)堯弘讓状には、「美濃。尾張。伊勢。三河之國諸檀那先達等」と美濃、尾張、伊勢、三河の四ヶ国名がみられるが、享禄2年11月(1529)の権大僧都良明讓状には飛驒国が加わり、次いで天正13年12月の権大僧都良雄讓状に至って更に遠江国の名がみえて、檀那所在地は6国に増大している。つまり経聞坊は戦国時代に白山檀那を拡大して行ったのである。そして、檀那、先達と宿坊との関係が、熊野信仰における在地信徒、参詣案内人としての先達、および宿坊経営者としての御師の関係と同じ性格を持っていたことが伺えるのである。檀那と御師との契約は、かなり、酷しい契約がなされたものの如くであり、他坊へは立寄らないとしたようである。一例として、御師と檀那の契約について、桜井文書によれば、

するがの国より白山へ始而詣申候、石徹白ニおいては、桜井平衛門処お、宿坊ニ相定申事実正也、我等め里ん兩人の儀に并在め之事に、かの処お宿坊可有候、かの輩ニついで、た坊より御いらん有間敷物に仍而後日証如件

かんはら之内きしま

もちつき

七郎左衛門
道 重 (花押)
松の菊蔵主 (花押)

天文十七年 御宿所
六月三日

つちのへさる

桜井平衛尉殿

上記の文書は文意不明の箇所があるが、駿河国から望月・松野の兩人が初めて白山に参詣し、桜井坊に宿泊したが、以後参詣のときは、同坊を宿所にするとのことの由である。こうして結ばれた宿坊(御師)と檀那の関係は以後継承されることになるのである。これら檀那場は、いわば宿坊にとって一種の縄張りであり、毎年ここに牛王札を配布して廻り、初穂をあつめた。また檀那場の信者たちは、講を結成して、白山へ代参者をも送った。代参者をたてないときは、オハチ料と称する金銭を社家に託した。オハチとは、棒の先に紙を御幣のように切ったものを付け、白山社の本殿の前に、願主何某と記し、これを立てならべることである。石徹白社家の旦那場は上記の外信濃・甲斐から遠く武蔵・上野にまでおよんでいた。

これら旦那場は、社家の一種の財産でもあったので、旦那場の領主から左記のような安堵状も出されているのである。

宿坊之事、如前々於家中参詣之者、石堂代桜井坊へ可著也。我々宿坊定相候上者自余之坊、違乱有間敷者也。 仍如件

天文廿貳癸丑年二月十一日

氏員 (花押)

桜井坊参

三浦氏員の家中の白山参詣者は必ず桜井坊に宿泊するようにとのことで、その後、永禄9年(1566)にも、三浦氏満から同様の許状を得ている。即ち桜井文書によれば、

三浦次郎左衛門尉氏満宿坊契約状

白山宮宿坊之事、氏員任一札旨、於家中参詣之者、如前々石堂代可為桜井坊如此相定上者、自余之坊 違乱有間敷候也

仍如件

永禄九丙寅年二月二九日

氏満 (花押)

桜井坊参

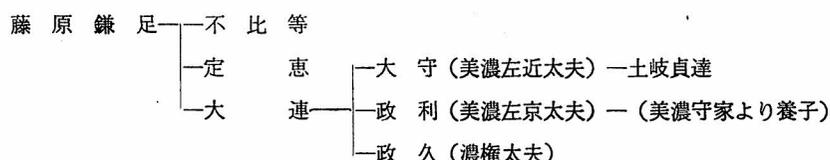
この檀那場は、売買の対象にもなり、天文20年(1551)桜井坊は京四郎という者から、尾張国において檀那場を買得し、天正9年(1581)に同じ桜井坊が信濃国において広範囲の檀那場を売渡しており、この種の売買契約書が多くみられる。かくて檀那場の増減等によって、社家の中にも盛衰があったが、さらに宝暦年間(1751~1764)の神道騒動(石徹白豊前騒動)によって、社家、社人の大改革がなされたのである。如何に白山信仰の大きく広く伸びていたかが伺える。

III. 高賀山と越前・美濃馬場との関繋

高賀山は武儀・郡上の両郡と越前穴馬の谷に繋る山であり、この高賀山を中心とする高賀信仰と称するものは、高賀白山信仰とされなくてはならぬものである。加賀白山を中心とする越前平泉寺、石徹白中居神社、美濃長滝寺、高賀白山、能郷白山、等白山信仰の重要な峠の交通路の御前立の前山であり、須弥山説における前伏拜山の一つである²⁾。

能郷白山が前山として、東海・東山地方の人に崇敬され白山権現を祀ったのは中世の初めであったであろうが、修験僧達が、北東の長滝白山から、高賀白山、能郷白山かのいずれかの峠の交通を利用した廊下性的地域は、白山信仰の真言・天台の文化に包摂されたものである。即ち高賀山から穴馬→石徹白→別山禅定は伊勢峠或は仏峠を越えるものが可成あり、末まで修験僧が駐留し、浄覚、蓮河、道源の修験僧が中心となり、寂貞などは大般若写経が行われているし、星宮神社には天曆7年(953)の写経のほかに大般若経15巻・高賀神社には、保延5年(1139)の大般若経のほか、554巻が残っている。この禅定道は美濃、尾張、三河方面から石徹白への近距離であり、長滝白山禅定が表禅定とするならば裏禅定道である。

能郷白山は西美濃の前山であり御前立山で越前大野飯峰山がその神祭場となったのと期を等しくするものと考えられ、いづれも泰澄の天台流布にその源を発していることは共通で、その発祥を元正天皇の養老2年(718)としていることである。即ち能郷白山神社の前身は花長神社であり、能郷禅定馬場であったのである。ここへ白山信仰の修験道の醍醐猿楽の山伏が高賀白山や星宮白山神社の如く、定着し、猿田彦神である花長神を、白山信仰の場におきかえ、「白山皇正一位花長神社」とし、後能郷白山神社としたものであろうと推察されるのである。根尾(仁王)村能郷白山神職家譜によれば



とある。大連は美濃左衛門尉美濃立花村権守、中臣姓を称し、従五位上で立花村上原(能郷)に住したし、大連は杉樹の巨木に神を感じて、ヌサを結び、神いますの場として、巨杉を祀っており、上代の原始密教の生活が、家譜の上から伺えるのであり、杉庄、木札庄と称したという。醍醐天皇の御宇に佐大臣忠平が、勅命を蒙って、美濃国川上花長神社と改称し、延喜式神明帳に記載されたともいう。大連の三子は、羽田2家、溝尻家に分れて、能郷を構成し、神事を奉仕してきたことは、石徹白の社家乙名(おてな)と同じであった。なお本地仏は、11面観音・聖観音・虚空蔵菩薩であり、白山大汝峰本地阿弥陀如来の姿が見えないのは、胎蔵界曼陀羅においては、阿弥陀如来は虚空蔵菩薩でも菩提の境地を具備するのであり、求聞持法の虚空蔵菩薩で代行が許されることから阿弥陀如来が見ないのであることを思えば、能郷白山は、白山奥の院の御前立の前伏拜山信仰としての能郷白山である。

濃越の山岳が行政的山岳として存在したのは、江戸幕府の宗教統制からであり、それ以前は、何らの障害になっていなかったのである。蠅帽子峠や温見峠などは、特に往来があり、越前と美濃を結ぶ西美濃の代表的要路で、幕末には天狗党の武田耕雲斎一隊が通り、戦国時代には、織田信長の越前攻めの折には、家臣の金森長近の越前への進入路でもあった³⁾。

これらは、濃越の峠である油坂峠、仏峠、花房峠等と共に、この山岳の壁は、実は壁ではなく、修

験道の禪定道の裏街道であり、山添の人達の濃越の経済、宗教の文化圏の要路であったことである。行政区画が明らかとなり、峠に番所が江戸時代におかれ、交通は絶えたが、それらの概念から濃越の宗教圏も絶えたということと、別山加宝社の本地仏が虚空蔵菩薩であり、石徹白の神頭職桜井、石徹白の社家が別山虚空蔵を美濃室と共に別当職を行ってきたことの追究がなされなかったため、高賀山麓の虚空蔵菩薩のみで高賀、星宮、那比を白山信仰と切離して想定した処に高賀信仰という新語が登場するに至ったのである。

この別山虚空蔵を考えるならば、石徹白中居神社の虚空蔵菩薩（現大師堂）も高賀山に向かっているなどという暴言も生れず、別山に向かっている虚空蔵菩薩（厳密には虚空蔵菩薩にあらず）と堂々といえるのである。

この峠の行政区画が現在でも、宗教圏として、何等の障害になっていない例として、越前鯖江誠証寺派本山の美濃廻りは、夏の報恩講の外に有縁同行済度のための持法会が春の彼岸から秋の彼岸までの間に持たれるのである。その経路は、鯖江→板垣峠→今立郡上池田村美濃俣泊り→熊河峠→大野郡西谷村熊河→温見峠→温見泊り→巢原→中島泊り→小沢→安馬家泊り→繩（這）帽子峠→根尾村大河原→黒津→越波→上大須→松田→小鹿→板屋→奥谷→口谷（昼食）→樽見河原泊り→神所→越卒→大井→長島→能郷（2泊）→下開田（2泊）→本郷（2泊）→上開田（2泊）→戸入（3泊）→門入（1泊）山手（2泊）樫原（2泊）→塚（3泊）→冠峠→河内泊り→板垣峠→鯖江 であり、宗教圏は美濃国でなく越前である。即ち、白山表禪定道は白山長滝寺馬場であり、裏禪定道は、高賀白山と、西美濃裏禪定道は能郷白山を起点とするのである。そして、これらの禪定道の間にある木振白山、甘奈美白山⁴⁾、洲原白山、大矢田白山、大山白山等は何れも前立山即ち前伏拝山としての白山である。

「板取村志」には、「島口村から北への街道は内ヶ谷村、平瀬分境目、花房峠（仏峠の西、滝波山の峠）に行程1里半でつき、これから先は越前国荷樽へ3里半で、島口から東への街道は郡上郡内ヶ谷村御境目へ行く。この番所は東と北への両道が見通しの良い所である。（中略）土地の人は御茶屋と呼んでいる」（濃州徇行記）。また「当時は郡上郡、山県郡、大野郡（越前）へ通する山道を頻繁に交通し、特に越前とは、商取引も盛んであった様である。北部の人達は、洞戸や岐阜などと取引するよりも、越前や郡上と取引する方が距離的にも近く便利であった」としている。

仏峠や花房峠が越前と美濃との廊下性を有し、経済圏が越前であったことを示している様に、白山信仰を中心とする上代よりの修験道の路は、最近まで生きて使用されていたことに注目しなくてはならない。しかしながら、洞戸村、板取村には、白山神社の他に神明神社がかなりあり、明治初年の神仏分離の折、政権に随伴しておこった神明社奉祭等に対して、古い神明社があることを見れば、越前上穴馬の上伊勢の神明社も同様古いと見るべきである。ここには神田と称するものもあって、上穴馬の伊勢谷と花房峠、仏峠を越えての板取川及び高賀山は、この角度から県史の主張する如く、神明圏のあったことを考察し、伊勢朝熊信仰と共に虚空蔵菩薩信仰を併せ考えて見る必要がこの辺にあったのであろう。

注2) 白山に対する里山即ち本山（とやま）に対する端山（はやま）=葉山なのである。

3) 郡上郡史、白鳥町史等では油坂越とするも、越前の各郷土史では、温見、蠅帽子越としている。

4) 甘奈美明神の外8神を祀る。釜ヶ嶽白山。

IV. 別山加宝社虚空蔵菩薩信仰

別山の普通本地仏が聖観音といわれているが、聖観音の外、加宝社の本地仏が虚空蔵菩薩であることを銘記されなくてはならない。

白山信仰における美濃側の虚空蔵菩薩を安置している社を列挙すれば、

長 滝	長滝白山神社	} 天 台 系
石徹白	白山中居神社	
洞戸村	高賀神社	} 真 言 系
美並村	星宮神社	
八幡町那比	那比神宮神社	
洞戸村	蓮華峰寺	
大垣赤坂	明星輪寺	

特に問題の虚空蔵菩薩については多くの懸仏の中に虚空蔵菩薩があることである。

高賀神社	懸仏	279面 (何れも重要文化財) 中
	虚空蔵菩薩	31面
	薬師如来	34面
	11面観音	18面
	阿弥陀如来	11面
星宮神社	懸仏	38面中
	虚空蔵菩薩	17面
	薬師如来	9面
	阿弥陀如来	5面
	11面観音	4面
	聖観音	2面 (不詳1面)
那比神宮神社	懸仏	247面

岐阜県史には、259面とし、その中で、虚空蔵菩薩像が最も多く、151面数えられるとあり（通史編中世741頁）、文化庁調査（昭和45年1月刊）「白山を中心とする文化財」では、247面とし、その中で虚空蔵菩薩と認められるものは、鎌倉期4面、南北朝1面、室町期3面の8面としている。昭和44年3月の県史通史編中世の報告と1年後の文化庁の報告との差の大きいのに改めて、高賀山信仰なるものの再調査を必要とすることを痛感すると共に、白山信仰圏の高賀白山を再認識しなくてはならない。

以上の外、この高賀山六社権現には、鎌倉、南北朝時代のものを中心とする文化財は、仏像彫刻101 神像63 肖像彫刻2 仮面類57 狛犬7 その他9等あり、その中心が虚空蔵菩薩が多いから、高賀山虚空蔵菩薩信仰だとしている。しかしながら、高賀山別当時の蓮華峰寺の古仏像群中には、その存在を見ないし、虚空蔵菩薩がないとされている白山長滝寺にも鑄面の虚空蔵菩薩が2面あることをしなくてはならない。高賀六社権現のみならず白山長滝寺や、能郷白山の虚空蔵菩薩或は、白山信仰圏の能登の石動山、尾口（加賀）の加宝社、平泉寺の加宝社等これらは総て、虚空蔵菩薩である。

『白山禪定私記』には「石動山ニテハ垂迹金色太子トアラハレ玉フ弥陀如来ト虚空蔵ト分身示現ノ躰、越南智石動山靈所各別ニアラズ」云々とあり、白山信仰圏の一郭に虚空蔵菩薩の存在することを述べている。また、『白山記』（長寛元年（1163））には、「次有宝社、名加宝、虚空蔵菩薩垂迹也」とあり、別山平にある加宝社のことであり、別山虚空蔵菩薩という故縁である。代々この加宝社は石徹白の石徹白家、桜井家の両家で別当職にあったのである。

『石徹白藤十郎申状』（永禄拾年六月十日）「彼三之御山之儀者、何も加州内ニテ御座候へ共、大

御前ハ飛驒三木方別当ニ而進退被仕候おなんちハ加賀那多寺より取行被申候、別山者、拙者昔より進退仕候、拙者造営仕分ハ、別山社・同拜殿・かほうの宮・こくさうの社・同拜殿・若宮殿・小白山薬師堂・大師堂以上九之堂社ニて御座候を、廿五文関文、三年二一度卅一文関、此両様を集、九ツ堂修理建立仕御事（以下略）」とし、別山に室堂或は堂舎を構える別当社家は、その修理工料と称して、参道に関所を置き別山登拜禪定の者から通過料を取っていたことである。また室町末期と認められる9月2日某申状は、当時石徹白村に社家10人および別山、虚空蔵両別当禰宣3人祝3人、神子5人らがあつたことを伝えており、その社人構成を示すと共に、石徹白の地が別山、虚空蔵信仰の直轄地的であつたことを証している。即ち『桜井家文書』には、「石徹白村拾人之社家衆並別山虚空蔵両別当禰祇三人 祝三人 神子五人 けんこ五人 せうし二人 己上 卅人」とあり、当時、別山は虚空蔵を以て、美濃禪定の本地仏としていることである。しかしながら別山大行事の本地仏聖観音は元来のままであり、『神道集』白山権限事の条には、

「別山大行事ハ本地請観音五人御在（中略）次郎王子本地虚空蔵菩薩也、香集世界補処十大士花翼国土定恵御弟子也、大手差庫蔵虚空下花广給」云々とあり、五人の王子とは

太子王子一 劍御前一 本地大聖不動明王
次郎王子一 本地 虚空蔵菩薩
三郎王子一 本地 地藏菩薩
四郎王子一 毘沙門天一 本地 文珠菩薩
五郎王子一 本地 弥勒菩薩

であり、聖観音を本地として、この神に五人の王子がおり、次郎王子が虚空蔵菩薩を本地としていることと、別山には、長寛年間に既に加宝社の次郎王子が虚空蔵信仰として厳然として存在し、石徹白、桜井両別当が、前記の如く、別山虚空蔵両別当とし、白山虚空蔵を白山中居神社の金銅虚空蔵菩薩を通して、平安末期の12世紀に前伏拝神社として展開しているのである。

V. 石徹白の虚空蔵菩薩

『岐阜県指定文化財調査報告書』によれば、「虚空蔵菩薩座像は、もと白山中居神社の神体であつたが、神仏分離の際、本社仏像は、すべて、中在所に大師堂並に観音堂として伝承され、観音菩薩としていたが、これは虚空蔵菩薩である。しかも等身のもので、かつ県内唯一の傑作で、天蓋、光背共に揃つた堂々たる仏像である。金銅板透彫の宝冠を戴き、張りのある面容と体の豊かな量感は、鎌倉時代も初期の代表的傑作として、見事な作である。当時白山信仰のいかに盛大なりしかを物語るものである。天蓋も県下稀なる堂々たるもの、光背は二重円光、その周囲は金銅板唐草透彫、ほとんど欠失なく、台座は五重蓮弁、二枚の欠失あり、右手屈臂、宝剣を持し、左手屈臂、手首、掌を上に向けて宝珠を捧げる姿勢である。眼は中だるみにして、横に長く切れ、天平彫刻の面影あり、口角はしまり、髭あり、首には三道見え、泰然と厳しい中にも温容である。白山中居神社は、奈良時代、泰澄大師、白山を開くとき当地に來り、社殿を修覆、拡張したという。元來、祭神は伊弉那諾で伊弉那冊命、大日靈貴尊を配祀すると伝う」とある。しかしながら、求聞持法に説く虚空蔵、金剛界曼荼羅の虚空蔵院から見ると正確には虚空蔵菩薩ではない。これについては次稿において述べることにする。一応現稿では、報告書の説に従うことにする。

「上杉系図」によると、白山権現の信者であつた藤原秀衡は、源正喜、藤原宗庸という二人の家人に命じ、三男の忠衡を添え、二体の鑄造仏を白山に奉納したとあり、元暦元年（1184）2月22日に平泉をたち、東山、東海両道を経て、越前大野郡の伊野原（現平泉寺の地）と石徹白の地に至り、両地

に神殿を建立し、翌年7月に完成し、尊像を安置して帰国したが、宗庸は再度石徹白を訪れ、神職の祝部家の娘をめとり神職となり、上村彦三郎ほか二人の郎党もみな社人となって、永く白山権現に仕えたとある。即ち尊像二体のうち、一体は勝山平泉寺白山中宮神社に、他の一体は石徹白白山中居神社に奉納されたものであるとされている。石徹白の上村氏は自から奥州藤原朝臣と称して来ているのもこの秀衡の家臣であったとする自尊心は現在でも生きている。秀衡と白山の結びつきは、平泉寺と称することや、「白山記」に白山禅頂の本宮に、従来の木彫仏に代えて5尺の金銅11面観音像を鑄造奉獻したのは、すでに長寛元年(1163)以前のことである。その外の史料でも、本社前の狛犬、平泉寺の梵鐘などもその寄進として伝えられ、また清衡の建てた平泉中尊寺と秀衡建立の毛越寺無量院とは、すでに鎮守神の一つとして白山宮が祀られている。これらから、元暦元年の奉獻は秀衡の白山信仰を認識する事跡として見られることである。

同年10月の秀衡病没によって、宗庸一行は帰るべき場所を失い、その時から金銅虚空蔵菩薩像は秀衡その人のような意味をもつようにもなったのである。また、「石徹白徳郎氏蔵」弘安七年七月七日懸仏銘文(写)には、虚空蔵菩薩について、

「奉治鑄虚空蔵御体

石徹白神社御宝前

右志者偏為信心女大院藤原氏女現世安穩後生善嘉也、仍而奉懸状如件

弘安七戊寅歲七月七日

藤原氏女 敬白

右者御社四月晦日 御祭礼之節大幣ニ奉懸来候御神鏡虚空蔵御鏡之御銘也、慶応三年四月十七日夜大宮殿御炎上之御御焼失ス」

云々とあり、虚空蔵菩薩信仰のあったことを示している。また『越知神社文書の泰澄大師伝記』(元和5年(1620))白山中居の条によれば、

「中居号虚空蔵岩屋。一之有幽谷。福德円満智恵虚空蔵功德尤深。為所願成就安此尊。是無始無終之尊。断迷開悟。来世必放金色光。令遂成仏之御誓願也。何輩三光之徳不戴乎」

云々とあり、虚空蔵岩屋と号したことは、虚空蔵菩薩が美濃禪定の大きな信仰圏の根源であったことが、聖観音、11面観音、阿弥陀如来の白山本地仏の中にあつて、注目されなくてはならない。

VI. 神仏集合における本地垂迹を白山について見ると

主 峰 御前峰—白山妙理大権現
(白山比咩神社奥宮) 2,702M

本地 11面観音

垂迹 伊弉册尊

奥 院 大汝峰—越南知(おなんち)大権現

本地 阿弥陀如来

垂迹 大己貴尊

別 山—小白山(こじらやま)大行事—別靈(わけのみたま)
(別山神社) 2,399M

本地 聖観音

垂迹 天忍穗耳尊

剣ヶ峰—本地—大聖不動明王

垂迹 瓊瓊杵尊

大講堂一字五間四面
 薬師堂一字一間四面
 阿弥陀堂一字一間四面
 聖靈堂一字一間四面
 鐘楼堂一字二階 舞殿一字五間
 關迦井堂一字 経蔵一字

以上十四字

右ノ内大講堂、鐘楼、経蔵ハ何等出堂ノ余地ナク全焼セシモノ、如ク、三神殿殆ント全焼ノ姿ニテ畏多クモ尊体ニ焼損アルモノ、如シ

文永八辛未 年十月日ト之レ在リ候」

とあり、山に千人、麓に千人の美濃馬場長滝寺は、その繁栄から壊滅的打撃を受け、馬場としての機能をなくしている。荒野と化したこの長滝から、高賀権現として、裏禅定道へとその復興的機能を有するまで転移したものと思される。即ちこの時代に、粥川社星宮大明神、藤谷社高賀本宮大明神、岩屋社那比新宮大明神の各社に浄覚（那比）、勸進聖人浄尊（星宮）、勸進聖人慶西（那比）或は五部大乘経書写に加った道誕、賢明、如一、悟一、淳真、懐恵、隆意、頼印、泰山桂安、心了、昇恵宗讚の修験道沙門や、高賀社の浄尊、鏡明、明心法橋、明西等の沙門も、新禅定道の飛躍的な昂揚の機会に虚空蔵求聞法を追究の中で、中心的に活躍した集団であろう。

長滝寺の復興には約半世紀が費いやされており、『正応二年（1290）、大宮殿再建』（宝幢坊文書）には

大宮殿再建
 上棟奉造立五間三面御社頭一字
 大願主沙弥信法
 勸進恵坊尊
 正応三年（1291）十月二十日
 大工右衛門大夫平支永
 大工左近太夫藤原依宗
 鍛冶仲権守忠綱

以上十二人」

或は『大講堂造立応長元年（1311）』（宝幢坊文書）には、

「大講堂造立ノコト左ノ如シ

梁間拾四間桁行十八間、但四方七尺縁組物榭形作二重垂木棟高九間四尺、丸柱数四十本、太サ九尺廻、合天井裏板、仏檀三間拾老間、黒漆塗檀、欄干在リ、東面中十四間扉、北南西扉二口宛

八講用論議座二個長九尺巾一間天井ハ厥手作ナリ

上棟奉造立大講堂一字

 応長元年（1311）辛亥七月四日上棟

院主唯性大徳 学頭権律師慶讚
 大勸進法橋栄誠 小勸進貞家大誠
 惣在庁阿闍梨光円 並 満山衆徒
 大工肥前権守の宗里 飛驒権守藤原宗安

音頭 右近太夫橋宗定
太郎太夫窓宗

木工以上三十二人トアリ」

如何に長滝寺が全力を挙げてこの復興に全力を挙げているかが伺われる。

なお、『正和三年(1315)脇座釈迦如来彫刻』(宝幢坊文書)によれば、

脇座釈迦如来彫ノ事 丈 二丈五尺 腹内ノ書

奉造立志者、偏為沙弥行兼現当二世所願成就円満、乃至法界衆生平等利益也

正和三年(1315)甲丑八月十九日

大檀那氣良庄惣政所 沙弥行兼 但馬法眼慶誉

大仏子 三河法眼定盛

郷 法眼定弁

脇座阿弥陀如来 大日

未詳

脇立四天王内持国天

足ノ下銘 丈 一丈五尺

奉造立持国天像一体

正和三年(1315)甲寅 卯月二十七日

願主沙弥蓮願

大仏子 法眼 定弁

同四天王参体 未詳

奈良東大寺よりも大きい大仏と大伽藍の長滝寺であり、表禅定としての権威は、白山美濃馬場の表徴でもあった。

『文保二年(1319)講堂供養』(宝幢坊文書)には、「長滝寺講堂供養

六月廿五日 甲寅

八専中 有

九月 丁卯 旧記ノ儘書ス

七月八日 丙寅 』

とあり、後醍醐天皇の足利尊氏が教書を下して祈禱を命ぜられた建武三年(1337)迄に実に66年の歳月を経て復興をしたのである。

2 密教の勃興

- ・永暦元年(1160)後白河皇の檢校法印覚讚を先達として熊野詣、
- ・承安四年(1174)公家の熊野参詣が多くなったこの時期に公家の吉田経房が、定宗阿闍梨、房州らを先達として6度目の禅定。
- ・建仁元年(1201)後鳥羽上皇は熊野詣に頻繁に参詣されたが、この年第4度目には、藤原定家が同行した。

熊野詣は、すさまじい勢で各地へ流行の度を高めて行った。西行法師も参籠した。

- ・承久二年(1220)公家藤原頼資及びその子経光が、20度の熊野詣。

この頃より牛玉宝印の護符守札が普及し、御師が檀那場を組織して行った。

- ・醍醐寺を創めた聖宝が当山派を作り、三宝院が伝法血脈をもって檢校となり、各地域に先達職をおいて在地山伏の統制を行なって行ったし、その真言宗醍醐寺三宝院当山派として展開させて行った。

これら以後は庶民階級に流行が移って行ったが、その一例は天台宗山門派の葛川修験道は民間発達の例である。

3 白山衆徒の勃興と内紛

- I 安元元年(1175) 加賀白山三社と八院(護国寺, 昌隆寺, 松谷寺, 蓮花寺, 善楽寺, 長寛寺, 涌泉寺, 隆明寺)の成立と,
- II 檢非違使五位尉 下藤と弟師経の鷓川の涌泉寺乱入焼仏に対する白山衆徒の起蹶, 数千人の上洛
- III 安元三年(1178) 日吉社の神輿を動かし, 強訴し, 師経, 師高の処罰
- IV 寿永二年(1183) 木曾義仲の北陸進出にあたって, 越前燧城に平泉寺の長吏斉明威儀師, 富樫入道仏誓以下6,000余騎が立籠ったが, 斉明は平氏に内応して落城, 俱利伽羅谷で平氏惨敗の折に首を刎ねらる。

この戦いに白山衆 覚明は義仲の合戦顧問格として参加

- V 木曾義仲は横江, 宮丸の二荘を白山社へ, 藤島七郷を平泉寺に寄進
- VI 延元二年(1338) 平泉寺衆徒は, 金崎城陥落後, 新田義貞再挙をはかった折, 三峰城で守護斯波高経に対抗し, 脇屋義助が指揮をとったが, 延暦寺と論争になった藤島荘を平泉寺領にしてくれるならばと, 御教書を高経が平泉寺に下したため, 足利方につき500余人の僧兵が高経に加勢し, 義貞は戦死し, 足利幕府より安堵。
- VII 源頼朝の地頭時光と白山宮領を巡って紛争し, 地頭一任の仲裁となったが, 白山宮の内部分裂によって, 神官, 僧侶から僧兵となって武士集団化へと転移して行った。
- VIII 慶長八年(1603) 尾添と牛首・風嵐との対立。
明暦元年(1655) 越前藩と加賀藩との白山嶺上社殿再興を巡って対立(杣取権と入山料)。
寛文八年(1668) 幕府裁断し, 白山麓18ヶ村を美濃郡代(武生本保陣屋)一高山郡代, 代官杉田九郎兵衛支配し天領とした。平泉寺白山三山を支配し200石朱印寺となる。
- IX 延宝十二年(1685) 白峰(牛首・風嵐)と尾添社家は禅定料を先達が初穂料の外1人200文をとる。幕府から500両の白山嶺上の造営金が出る。
御前, 別山は天台宗平泉寺と比叡山の参下とし, 白峰衆が支配
大汝は真言宗高野山天徳院の参下で, 尾添衆が支配, 白山本宮は幕府から見はなされた。
- X 越前馬場の内部分裂, 正徳元年(1711)「白山神主」「白山社家」の称号を白峰の衆が平泉寺に断りなく使用し, 惣神主と称したことにより, 先達として200文をとることを禁止し, 白山三山の奉仕権を喪失。

当時平泉寺は江戸東叡山寛永寺に比叡山から変更

享保十七年(1733) 平泉寺の白山三山支配が決定し, 幕末迄直轄支配となる。

美濃馬場の別山支配は, 美濃室と加宝社のみとなり, 別山支配権は平泉寺が掌握し元文三年(1738)には, 決定的となった。

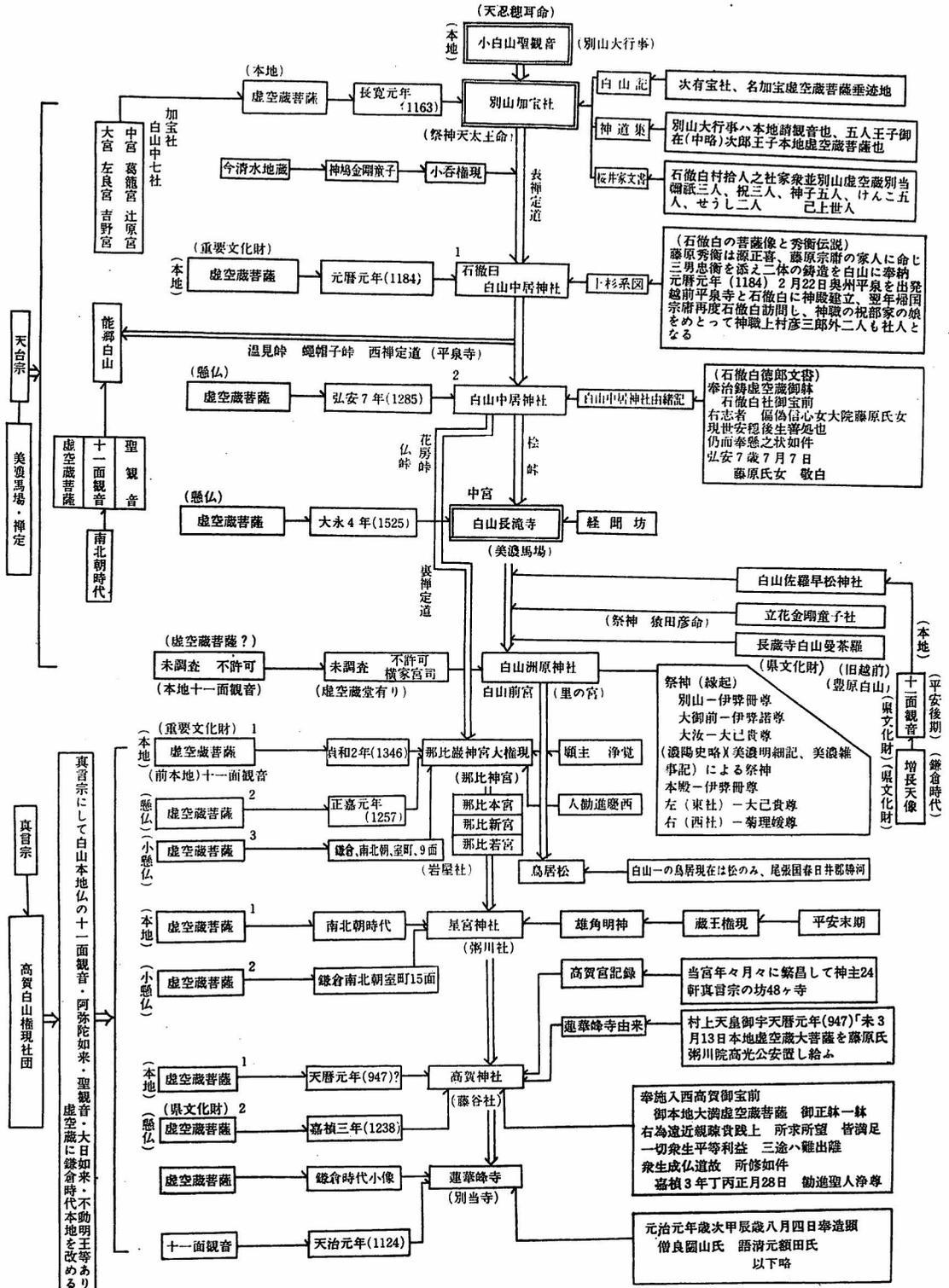
『北国白山別当職紛擾之事, 指上一札之事』(長滝寺文書)

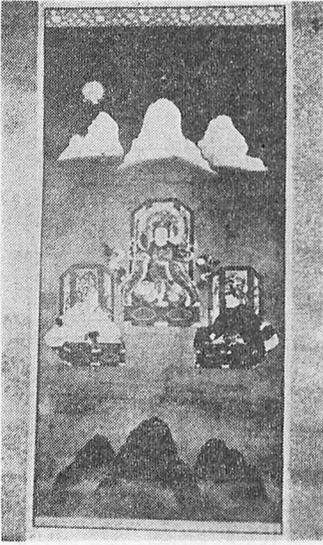
「……(前略)自今, 尾添村, 石徹白之者共一山中曾テ差不申一山へ一切立入不申候 様ニ奉願候且, 石徹白之者共北国白山と梵字之札宝印ヲ猥リニ押出有之ヲモ相賦候由, 此儀モ向後決シテ無用ニ致シ候様ニ仕旨ニ申上候(以下略)」

VIII. 美濃馬場の興隆と高賀権現の勃興

- I 国家仏教として, 政治的興隆と共に地方においても, 天台, 真言は隆盛を極めた。白山長滝寺の

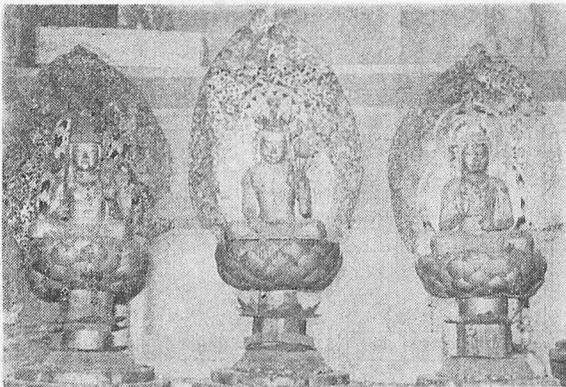
別山加宝虚空蔵菩薩信仰系列 (美濃馬場禪定道)





長滝寺白山曼荼羅 (2幅)

松木秀夫撮影



能郷白山神社 本地仏 金銅製 虚空蔵菩薩十一面観音 聖観音 (南北朝時代)

吉田幸平撮影



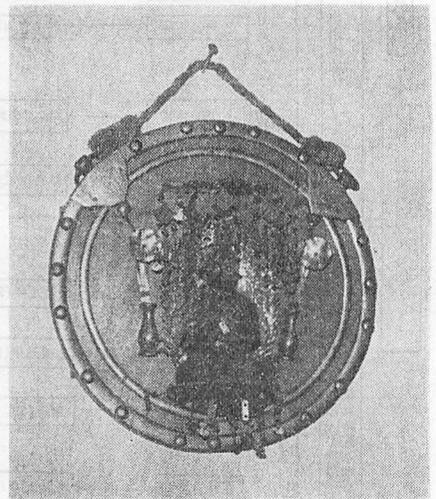
石徹白大師堂 重文虚空蔵菩薩 (鎌倉初期)

吉田幸平撮影



長滝寺虚空蔵菩薩

松木秀夫撮影



星宮神社 懸 仏 吉田幸平撮影

僧坊は、経聞坊慶祐の記した寛文8年(1669)の記録には、

韋原谷60坊、天正の初め、大雨の後に、水無の洞抜け出て一時に壊滅して、寛永年間に退転したものは、地藏坊、正円房、西泉坊、宝泉坊、玉養坊、宝寿院、成就坊、本覚坊があり、坊中の家来屋敷38軒で、衆徒17侶もあったが衰退した。寛文頃に残った坊は、西泉坊、福寿坊、一乗坊、中之坊、池之坊、宝幢坊、経聞坊、真如坊、等覚坊、玉村坊、明堯坊、円教坊、持善坊、竹本坊、林泉坊、大日坊、禅養坊、円城坊、執行坊(神主)、長床座中、泉光坊、龍蔵坊、三教坊、金蔵坊等があり、中世から近世にかけて、東海の白山神社の拠点として大刹で、天台別院として、その隆昌が伺える。

II 高賀権現の星宮神社、那比新宮、高賀神社、滝宮神社、金峰神社等の集団は、高賀山(1224M)、瓢ヶ岳(1162M)を取り囲むもので、美濃馬場の天台系と、対する真言系の流れを見る神社群で、雄角(おづ)明神があり蔵王権現がある。那比新宮も星宮神社も本地は神像でなく、虚空蔵菩薩で、那比新宮の懸仏の中に、

奉鑄頭高賀山権現御正躰虚空蔵菩薩形像一躰金銅鏡面

正嘉元年丁巳十二月十四日
(1257)

大勸進聖人慶西

とある。これから13世紀には高賀山権現の本地が虚空蔵であり、また、高賀神社の別当寺蓮華峰寺の11面観音には、天治元年(1124)の銘があり、元来本地仏であった高賀神社のものが、神仏分離の折に他の仏像、大日如来、不動明王、毘沙門天、地藏菩薩と一緒に安置されたものであるが、鎌倉期に本地を虚空蔵菩薩と改めたようで、鎌倉期の虚空蔵菩薩がある。さらに星宮神社、那比新宮も鎌倉期の虚空蔵菩薩が本地であることを見れば、同じく本地を虚空蔵菩薩に替えている。星宮神社別当寺粥川寺の不動明王は藤原期ともいわれるが、星宮神社の二座二神の欠座の何等かのものではあつたのであろう。若し本地仏があれば、白山本地仏としては、十一面観音の阿弥陀如来が鎮座されていたと思考されるのである。

即ち、平安時代から鎌倉時代にかけて、両部神道(胎蔵界曼荼羅、金剛界曼荼羅)的となり、本地垂迹の確立を見る頃から、高賀神社、那比新宮、星宮神社は、一斉に本地を虚空蔵菩薩に改めて行ったことは、別山加宝社の虚空蔵菩薩が既に確立しており、修験道における流行の虚空蔵求聞持法の持つものが、合一して行ったものと思惟される。もともと密教には、金剛界、胎蔵界の曼荼羅があり、ともに大日如来を主尊とする密教諸尊の位置を示し、その世界観を体系的に図式化したものであるが、そのうち胎蔵界曼荼羅の虚空蔵院と称する下部の一画の中にある。

III 虚空蔵求聞持法 虚空蔵菩薩は智恵を増加し、記憶力を強くする主尊で、求聞持法とは、一度聞いたことは決して忘れないという義である。文珠菩薩も智恵の本尊ではあるが策略とか謀計という側のもので、虚空蔵の方は学問研究の方の智識を主とするものである。

弘法大師は芸州厳島の弥山で、求聞持法を修め、真言宗の各大師も多くこの法を修めた。特に修験道の沙門は求聞持法を修めるのが鎌倉末期には爆発の人氣があり、山岳仏教における真言宗の代名詞的な勢があつたことの例は、枚挙に遑がない。虚空蔵菩薩は本来如意宝珠の仏格化であるという。大日如来の福と智の正法輪に現われたものであるという。この真言を毎日朝夕、また、三時に幾遍宛と定めて、百万遍に達するときには大智慧を得て、見聞した所は一切忘れないとされた。

求聞持法の外に、不動明王護摩法、孔雀明王延命持仙法、愛染明王馬陰藏法、金剛夜叉降神法などあつたが、修験道の修法として、求聞持法が多く行われた。その中で智徳の守護尊として金剛蔵王菩薩が脚光を浴びて来たのであり、星宮の雄角明神の蔵王権現があることを見ても、醍醐寺の真

言宗の修験道がこの地に、妖怪退治伝説と共に存在していたことを容易に知る共通のものが見出されるのである。

IX. 高賀白山への醍醐寺沙門の集結

(イ) 建武元年(1334)建武中興が破れて、後醍醐天皇が吉野に移られてから、長者文観は、勸進沙門でもあったが、醍醐寺を本拠として、天皇のためあらゆる祈禱修法を尽した。やがて公武合体が破れるに及んでその地位を追われ、河内金剛寺で正平13年80才の生涯を終ったが、醍醐寺の修験道の山伏や多く沙門は西に東に散って行かなければならなかった。その醍醐寺の集団がこの高賀権現に、地方修験として隠密行動の場として、山伏の寺として、白山の修験者としての高賀権現集団と思われる。

勿論彼等の中には、隠住的と山林抖擞の修行的のものがあつたであろう。これらは、行者個人の好尚と性向に左右させられたであろうことはいうまでもない。

『高賀神社』懸仏中

奉施入西高賀御宝前

御本地大満虚空蔵菩薩 御正躰一躰

右為遠近親疎貴賤上、所求所望、皆満足、一切衆生平等利益、三途八難出離、衆生成仏道故、所修如件

嘉禎三年丁丙正月廿八日

勸進聖人淨尊

などは、隠住型の山伏の聖(ひじり)であつたことが知れる。

(ロ) 長屋氏 板取川高賀谷の郷士 長屋信濃守豊重は近江源氏の後裔と称し、或は鎌倉権五郎平景政の裔と称するも、その出自は不詳であり、一般には中世禪師の集団頭領だとされている。それが16世紀になると板取田口城主として、弘治2年(1567)長良川合戦や、その他の郷土誌にも登場する。爾後26年、治乱興亡に明暮れる美濃諸士の多くは亡び去って行く中に、全然その痛手を受けずに生き長らえ、相変ず板取に居たのは何であつたのか。長屋氏族を木地師から発展した地侍としてのみ解決を与えているが、筆者は木地師を背景とした、白山裏禪定の先達頭として、往還路の目付の意味から、近江比叡山から配置されたものの大先達でもあつたと推察する。即ち、高賀神社の神主を、武藤、長屋の両家が行っており、安永四年(1775)9月かねがね家格の上位を主張して争っていた両家は八幡宮の遷宮に臨み、神主役の争奪で争い村役人が仲裁に入って調停が成立した。

- ① 八幡宮の遷宮は武藤家が神官を務め、その代り来年行われる虚空蔵菩薩の遷宮には長屋家が神官を務めること。
- ② 東屋敷分の宮については、両家が各々別々に祭礼を行うこと。
- ③ それ以外の御宮の神主は両家が一年交代で務めること。
- ④ 高賀山頂の児神社へ参詣する雨乞神事の祭の「峰登り但改役」も両家一年交代で務めること。右四ヶ条を両家とも了承し以後は互に異議を申さないようにしている。

証文一札之事

- 一 此度両性御変請致出来候ニ付両所出入仕。村方御取扱被下候処、両所納得仕、四屋敷為内旨、八幡様御遷宮は私一家神官旨而相済申度存候事。来年虚空蔵様御遷宮其節長屋ニ而相済可被成候。右ニタ各々而東屋敷分相動申候筈並ニ以外之御宮もかく年ニ相動可申候此以後妨害も少も申間敷候 但シ峰登り但改役もかく年ニ相動可申候

右以取扱被下段有かたく奉存為後日一札候而 如件
安永四年(1775)末, 九月廿五日

助 治 良
左 重 良
孫 重 良
左 兵 衛
九郎右衛門

御取扱中

市之進殿
治郎衛殿
八兵衛殿
長兵衛殿
久七殿
兵 藏殿

とある。また『藤原氏長屋正統記』(長屋昭二文書)また同じく、長水寺伝の『藤原系長屋系図』には、長屋武藏守国成が正慶三年(1333)新田義貞が、鎌倉を攻略して北条高時を滅ぼした時、一族の多くと共に自害したが、その一族の林式部郷豊長は応永5年(1398)泉州で討死し、その二男は20才で出家して法名を長憲といい、白山長滝寺の天台座主になっている。

(前略)

後小松院 応永五年戊寅(1399)

林式部郷豊長

従四位下戦死泉州, 豊長二男出家

法名長憲二十才住執当法印, 同時濃州下向

任長滝寺天台座主任権僧正

座主任権僧正長憲

其後長屋一家一人モ許任者無之

天文五年申正月吉日

白山長滝寺権座主法印

阿名院権大僧都妙海書之事 とある。

阿名院はもと花蔵院といった。長禄年中に至って中絶したのを、享禄2年道雅が再興して阿名院といい、永禄6年(1564)以来白山神社の別当職であったが、寛保年間に別当職を平泉寺に譲ったもので、長滝寺の筆頭坊であった。

『阿名院菩提寺之事』(宝幢坊文書)には、

一 阿名院事始ハ真言宗たりといへ共、為満山天台宗慶長年中ニ天台山より秀盛法印ヲ申下シ、叡山之末寺ニ相成申候、従是長滝寺満山喜所と成し此以後秀盛法印・単海法印天台宗ヲ継、住持被仕候

一 白山モ始ハ三論宗たりといえ共、久安より天台ニ成申候へハ、三論トハ不被申候、阿名院も始真言宗たりといへ共、秀盛法印より天台ニ成申候へハ、真言と不被申候(以下略)

とあり、高賀神社の長屋社家の一族から長滝寺の座主が出たことは、長滝寺を始め、阿名院、経聞坊等も真言宗で美濃馬場は超頭派であったことが見られるし、特筆されなくてはならない。また内ヶ谷

部落の金山には長屋氏の創建した白山神社があり、白山大権現の衆徒であったことは誤りがない。また、熊野や金峯山の修験道が当時流入していたことは、

『正□二年癸酉之二月三日未時許書写畢』(那比新官文書)に

「^(後)楠木兵衛正成、於金剛山構城郭、応党宮(大塔宮)御軍之最中也」

とあり、その情報が山伏を通じてもたらされていることでも明らかである。

そして、当時、天台と真言とは、その禪定においてそれ程の区別をしていなかった様であり、『尋尊大僧正記』明応元年(1492)8月23日の条の紀州根比山の条には、「別当三宝院末也、東寺末也、然而山伏共聖護院下方也」云々とあり、渾然として、その禪定を極めたものの様である。しかしながら、高賀神社には、地藏菩薩、龍樹菩薩、富楼那尊者、毘沙門天を画いた『愛宕曼荼羅』があり、或いは「弘法大師御作、文殊菩薩を峰児大明神之御前立と可致」とあって真言宗であったことを証している。また『高賀宮記録』には、「神主24軒 真言宗の坊48ヶ寺と相成」云々とあり、真言宗であったことは、決定的である。

ついでながら、高賀神社の神紋は、16弁の菊と五七の桐であり、星宮も那比も、長滝白山も、石徹白中居白山、大白山、飛驒の千光寺、平泉寺、白山比咩神社等、白山に関する神紋は全部この16弁の菊と五七桐紋であることを知れば、高賀権現はすべて白山神社であったことが知られ、那比新宮・星宮神社も長滝白山神社宮司、若宮成光氏の言によれば、「江戸時代から明治の頃まで、長滝白山から祈禱に行っていた」とのことである。また建築様式でも高賀神社は白山前宮洲原白山神社と同じ、入母屋流れ勾配の三神三座即ち、中央に御前、左に大汝、右に別山を祈っており、那比新宮は分祠法式の奥院型式であり、本宮、新宮、若宮といずれも中世以前においては11面観音、阿弥陀如来、聖観音が安置されていたのを、本地虚空蔵菩薩に改めて行ったことを知らなくてはならない。が前述の如く13世紀後半のことであり、高賀白山を本質的に替えたものでなく、むしろ別山加宝社の虚空蔵菩薩本地に、より白山加宝社を通じて別山禪定を強めたともいえるのである。能郷白山もまた前述の如く阿弥陀如来を虚空蔵に置き替えているが、これらは、いずれも高賀権現や中居白山神社の虚空蔵と期を一にするものであり、白山信仰圏における須弥山説における前立として美濃禪定の虚空蔵と見なくてはならない。独特の高賀山信仰として見る近視眼的でなく白山修験道の大きな信仰圏のうねりの流れの中で、とらえて行く必要がある。

信仰の伝播の民間信仰の型式にはいろいろあるが、信仰は、或る時期に爆発的に流布して行く性質があり、特に優秀な求道の僧がその指導的役割をはたすものである。

I 大峯山における弥勒浄土の内院として、笠置山を外院としたものや(平安期)、

II 箱根の精進池を中心とする地藏菩薩信仰(永仁年間)

III 美濃の伊自良周辺におきた庚申信仰(江戸期)

IV 飛驒の上宝村、丹生川の恵比寿大黒信仰(江戸期)等の例を見ることから、高賀権現の虚空蔵菩薩信仰も加宝社の本地と併せ考察する必要がある。

文 献

- | | |
|-------|----------------|
| 服部 如実 | 修験道要典 |
| 広瀬 誠 | 立山と白山 |
| 堀 一郎 | 我國民間信仰史の研究 上・下 |
| 井上 正 | 石徹白の菩薩像と秀衡伝説 |
| 小林 鈔次 | 白山信仰の南伸 |

小酒井市左門・吉岡 勲	粥川の歴史と家譜
近藤 喜博	白山を中心とする文化財 岐阜県(文化庁)
児玉 洋一	熊野三山経済史
宮地 直一	熊野三山の史的研究
村山 修一	山伏の歴史
村山 修一	本地垂迹
小野 清秀	加持祈禱秘密大全
桜井徳太郎	神仏交渉史
杉本 寿	越前誠照寺本山の美濃夏廻
高瀬 重雄	古代山岳信仰の史的考察
和歌森太郎	修験道史研究
渡辺 賢雄	長屋高橋氏と木地師
岐阜県史	通史編 中世
郡上郡史	合本
白 山	北国新聞社
長滝寺文書	こしのしらやま 略録夜話
越知神社文書	泰澄大師伝記
白鳥町史	史料編
続 白山紀行	白峰村

Summary

Mt. Hakusan has a feminine figure in its composition which includes three lofty peaks called of the Gozen-no-mine, the Ohnanji and the Bessan. They rise up about 2,000 meters. The Hakusan consists of these mountains and stands in the center of Honshu-island in Japan.

In honor of this mountain, people worshiped it as the god of water. Regarding it nearest to the sun that controls water and growth of plants, they had been invoking it for better harvest. People also believed that it conceives immortal spirits of their ancestors, and people wished to consign their soul to him that dwells in this mountain. They made graves at the foot of it.

At the ancient time, SHUGENDO (the mountaineering asceticism) dissolved in the TENDAI sect of Buddhism or the SHINGON sect of Buddhism with the TAOISM of china and the ONMYODO, and the SHUGENDO developed into the original mountain religion, which was kept by monks who disciplined very strictly. The monks secluded themselves from the world but they had been kept by the Emperor and his court then. In this character of the noble religion on the Dharana, ENNO-GYO-JYA (Upasaka saint) was the founder of this religion. It had an esoteric mystery and was put into people minds.

The new idea of a mountaineering was an ascetic to filter into people's minds chanting an incantation. This was the TANTRIC Buddhism as the founder of a religion.

At that time, Honjisuijaku which was the same rank in regard to the Buddhist saint and the Shintoist appeared in a shape of god as the the genuine Buddhist at the close of the Heian period (8th century) in Japan.

Then Honjisuijaku was defined in the both Shintoism (Rohu Shindoism) and Hitajitsu Shindoism of Sanno (Mantraya). Especially, three religious mountains—the Kumano in Yamato district, Mt. Ohmine in Yoshino, Haguro in Dewa district, Mt. Hikosan in Kyushu district, Mt. Taisen in Hohki district, Mt. Ishizuchi in Shikoku were typical monk's mountains. These representative mountains are well known in the literature or old documentary records. In these researches of Mt. Hakusan was prosperous.

We could find that about 1,000 grew much person lived on the top of the mountain and more than 1,000 person lived at the foot of the mountain. Their purpose was to climb the mountain and to pray to god as a group of meditative concentration.

But, the prosperity of the mountainous religion suffered from internal dissension. The strife among the Hakusan temple in Kaga district, the Nagataki temple in Mino district and the Heisen temple in Echizen district began to get a dominion of the top of mountain and to transfer of a right of forestry. The men who joined this battle grew up as monks' soldir called SŌHEI. They fought against the feudal government (BAKUFU) and lost a battle. At the recent time, they fought against the Shinshu sect of Buddhism which was organized the farming riot, and lost a battle again. Therefore the power of soldiers in temple effaced themselves completely. As a result of these battles, we couldn't find any documentary records or literature in the cause of their temples were almost burnt down.

For that reason: I'm sorry to say that the research of mountain worship about Mt. Hakusan left something to be desired as compared with another studies of the mountainous religion. Mt. Bessan was a part of Mt. Hakusan which was a way on the meditative concentration (SAMADHI) in Mino district. It was called MINO-BANBA and it could be ascended from the Pacific side of Japan. Mt. Bessan was not a center of Hakusan faith because it was far from the top of Mt. Hakusan. The Nagataki temple in Mino-hakusan fell in battle against the Heisen-temple in Echizen and then a suite to the feudal government happened in the earlist Edo era (1596-1867).

For these reasons a above, the Buddhist faith of Hakusan fell from its situation in spite of the power had been bigger than others. Then, there were about 2,700 Hakusan Shinto Shrine all over Japan, about 600 shrines in Mino district (Gifu prefecture), about 450 shrines Echizen (Fukui prefecture), about 350 shrines in Kaga (Ishikawa prefecture). This Buddhist faith of Hakusan dedicated to Buddha with elevenfaces on the GOZEN-NO-MINE, to Buddha of Amida on the OHNANJI, and to SHOU-KANNON on the Bessan.

Under the control of HEISEN-TEMPLE, the Shinto shrine KA-HO and MINO-MURO were granted as pilgrims' logings and the place where persons pray, both in the Hakusan-Nagataki temple and the Shinto shrine ITOSHIRO-HAKUSAN-CHUKYO (Gujo-

district in GIFU-prefecture).

The god of the Shinto Shrine KA-HO was the HIKOHOKAMI-NO-MIKOTO and its principal image of Buddha was the KOKUZOBOSATS. The Buddha in the ITOSHIRO-HAKUSAN-CHUKYO shrine which was the KOKUZOBOSATSU too.

At present, it is enshrined in the ITOSHIRO-TAISHIDO as the important cultural property of Japan. It was moved into this TAISHIDO at the time when the anti-Buddhist movement led to the destruction of Buddhist temples in the Meiji era (1868-1912). It was made of gilt bronze to be as large as the life, and made in Kamakura era (1190-1333). We can also find the hanging Buddhist on the board of KOKUZO in the Hakusan-Nagataki temple without the principal image of Buddhist. In the Hakusan-Shinto Shrine which stands in Mino-city of Gifu prefecture is KOKUZO shrine too. In such looking way, we must consider the problem that there was a stream of the passage of the Buddhist saint faith KOKUZO-BOSATSU. Buddhist saint faith KOKUZO-BOSATSU in confession in the Shinto Shrine KA-HO was remained in the road of meditative concentration of Mino except the principal image of Hakusan Buddhist.

In the year of Bun-ei (1272) the Hakusan-Nagataki-temple burnt down on a big fire and was reduced ashes. For such reason, the Nagataki-temple was put out of the cardinal commission of Buddhist in Mino-Banba. While reconstruction of the Nagataki-temple took a half centuries, the road of meditative concentration of Mino-Banba was switched over to a byway of the Buddhist.

Mt. Kohga is Kohga-Hakusan, and it is situated among Mt. Nōgo-Hakusan, Mt. Kibuli-Hakusan, Mt. Ohyada-Hakusan, and Mt. Ohyama-Hakusan. These mountains were the front faith in Mino sphere. We could find about 200 hanging Buddhists on the board of the KOKUZO (important cultural properties in Japan) in the Shinto Shrine Kōhga, Nabi, and Hoshino-miya which stand at the foot of Mt. Kōhga-Hakusan. But, in the history of Gifu prefecture, historians described that Mt. Kōhga-Hakusan had been only the Buddhist saint faith Kokuzo, and named "the independence faith of Mt. Kohga". They described this history of faith over 200 pages by mistake. I wrote this thesis on the confession of faith Hakusan to let them correct their studies. It is not uncommon to make such errors and exert their authorities in Japan.